府中町ふるさと歴史散歩〔第10回〕

文化財としての考古学の資料 ③ 弥生時代の資料 有段石斧

今からおよそ２４００年前の日本列島において、最初のコメ作りという食料生産を基礎とする暮らしが始まったのが弥生時代である。イネはもともと日本にないもので、中国の長江下流域の水稲耕作技術が、直接に、または朝鮮半島南部など、さまざまなルートを経てわが国に伝わった。近年の考古学では、大陸と朝鮮半島南部から渡来した人々が稲作農耕、機織り、養蚕、青銅器の鋳造と鉄器の鍛造などの最新技術（ハイテク）をもたらした。また、木材加工用の片刃石斧や石包丁などの大陸系の磨製石器も伝えられた。有段石斧もそのひとつである。

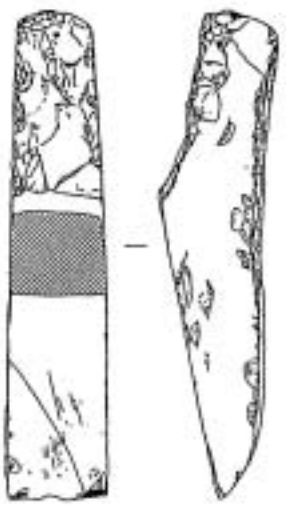
図の有段石斧は、１９６３年に石井城にある宅地内の浄化槽工事の際に単独で発見されたものである。当時、このような形の石斧は国内で発見例がほとんどなかったため、大学の考古学の専門家さえも首をひねるもので、日本のものではないと言うのが結論であった。お隣の中国には、かなり前から長江南部の水稲耕作の卓越地域の多数の遺跡からと朝鮮半島の出土例が知られていた。中国の有段石斧の中にはその形が瓜二つと言ってよいほど似たものがある。

現在、石井城出土の有段石斧（複製品）は歴史民俗資料館に展示されている。なお詳細は『安芸府中町史』第二巻にある。

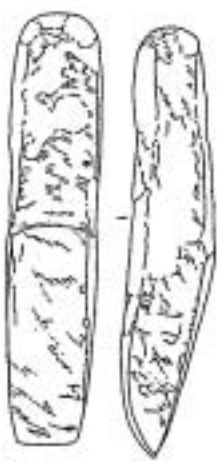
その後、神奈川県秦野市砂田台遺跡、茨城県岩井市鈴木畑遺跡、山口県長門二見、熊本県などの遺跡からの発見例があり、数は少ないけれども確実に弥生時代の石器である。つまり、大陸や朝鮮半島から北九州や山口県にかけてイネと栽培技術を持って来た渡来人は縄文人とともに新文化を作った。それが弥生文化である。有段石斧はそれを物語る資料である。

府中町文化財保護審議会
会長　横田　禎昭

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎２８６―３２７２



石井城第一号遺跡出土の有段石斧実測図



神奈川県秦野市砂田台遺跡４号方形周溝墓（弥生時代）出土の有段石斧実測図

0　5cm

ポリネシアの有段石斧（矢印）の装着例